

職人の技

シリーズ③⑨ 〈手妻師〉

藤山晃太郎 さん

西洋のモダンでスピーディー

なマジックの陰で、いつしかその存在を忘れられていた感のある日本の古典奇術「手妻」。

藤山さんはその現状に風穴を開けた一人だ。公益社団法人日本奇術協会が認定するベストマジシャン3年連続受賞の才能は、手妻の何に魅せられ、何を魅せようというのか。

「手妻は、単に和装をして行う奇術ではありません。手妻の魅力は所作の美しさや見立て、背景にあるストーリーにこそあります」

も優先するべきことがある。

「手妻にとつては、一つがいの蝶が花に止まり、雄蝶が雌蝶を誘って、夫婦仲むつまじく…という、美しいストーリーこそが重要なのでございます。『わたしは改良して3匹にできるよ』『じゃあわたしは4匹だ』ではないんです。一つがいの蝶でこそ成立する。不思議は構成要素の1つ。すべてではないんです」

「驚き」に対して人は次第に鈍感になり、次の不思議を求め、その欲に応え続けることも1つの道だが、違う方向性があるのではないか。

「サーカスでは、『シルクド・

ソレイユ』の成功があります。

綱渡りや虎の輪くぐりなどの危険技の追求から、より身体表現の美しさを魅せるヌーベルシルクの登場で、アートの昇華させたのです」

美しさは深まっていく。バレエ、オーケストラ、美術、伝統舞踊。奇術の進化と変化の手掛かりは過去にあった。なぜ一つがいの蝶でなければならぬのか。それこそが、手妻が見る者に訴えるものであり、藤山さんが突き詰めようとする魅力。

「不思議さや驚きだけでは飽きません。何度見ても飽きません。動画で繰り返して見ることができると今の時代に、むしろ適しているのではないのでしょうか」

藤山さんが自分に課すテーマは、伝統の中にある本質を守りながら、今の時代に華開かせること。

「伝統を徹底的に守るだけではなく、また伝統を無視するのではなく、本来の伝統を踏まえて、今の時代にふさわしいエンターテインメントにしなければいけません」

守っているだけでは進化はしないが、進化にばかり目が向いていては本質を失う。

「厳しい日本料理の修業をして、作法や流儀などに通底するものがある。そういう本物の料理人の方が作れば、バルサミコ酢やアボカドを使ってもそれは日本料理になる。わたしが目指すのはそこでございます」

しかし、過去あったものを生かしながら新しい息吹を取り込むことは「いばらの道」とも感じている。さながら江戸時代にタイムスリップしたかのような世界づくりを徹底すること、伝統的な決まりの所作を行うこと。奇術のタネとして、新しい化学素材が目の前にあつたとしても、軽々に使うことはできない。あらためて古典が持っている魅力を追求し、その魅力を残しながら現代の洗練につなげていく作業。苦難でもあるけれど、それこそがこの道の醍醐味。

観客を刺激できるのは、驚



文=岩瀬 大二
text: Dajji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



きや不思議だけではない。蝶の舞。精巧に作り込まれているわけでもないただの紙が、手妻師によって、観客の心の中で美しく舞う。

「枯れ山水と同じでございます。観客の皆さまそれぞれが、それぞれの蝶を思い描け

るから面白い。ある人にはモンシロチョウに見えて、ある人にはアゲハチョウに見える。外国の方には外国の蝶が見える。想像力で、人はどこにでも飛んで行けるのです」

ストーリーと美しい動きの中で、一度の刺激ではなく、何

度も何度も見ているうちに深まってく楽しさ。ヌーベル・シルクが世界を驚かせたように、日本の古典奇術である手妻が脚光を浴びる。古典を突き詰めていくことで、若き手妻師は新しいエンターテインメントを作り上げていく。



PROFILE

ふじやま・こうたろう

手妻の大家であり文化庁芸術祭大賞受賞者である藤山新太郎の一番弟子として修業し、正当な手妻を継承。2006年藤山姓を襲名。2010年から3年連続で公益社団法人日本奇術協会「ベストマジシャン」第1位に選ばれる。マジックの聖地と称される米・ロサンゼルス「Magic Castle」出演など、アジア、欧州など海外での大会出場歴も多く、近年ではインターネット動画配信なども駆使し手妻の世界を広げている。